

健康への

メッセージ

シリーズ ①⑨

胃の病気 (II)

光町の皆さんこんにちは。今回も胃の病気について述べます。前回は胃の働きやピロリ菌の話、検査法について述べました。今回は具体的な病気についてお話しします。

胃壁の浅い炎症である「びらん」は「胃炎」とも言われています。胃では常に食物の消化活動やストレスにより胃の壁に炎症が起きています。胃炎はいつでも起こりますが、すぐに良くなります。炎症が進むと深い傷である「潰瘍」になります。自覚症状として、胃もたれ感や食欲低下が起こり、空腹時に上腹部に痛みを感じます。潰瘍が深くなると出血もみられます。吐血や出血が十二指腸側に流れると黒い便がでる下血となります。

以前は胃潰瘍の薬は効果が不十分で、出血したり再発を繰り返す難治性の潰瘍が多く、胃の切除術が行われていました。最近の20年間で胃酸分泌抑制薬が有効となり、手術例は減少しています。前回述べたようにピロリ菌の存在が判明してから、その除菌が行われ、難治性再発性の潰瘍はさらに減少しています。

胃潰瘍は主として内視鏡によりその存在診断と病気の時期の診断が行われています。悪性の疑いのあるときには粘膜の一部を採って調べる生検により鑑別診断も行われます。活動期や治癒期は投薬加療が行われ、癒痕期では慎重な経過観察がなされます。

胃潰瘍の診療では常に悪性腫瘍(即ち胃癌)が併発していないかが一番の問題です。内視鏡的な

観察とともに、怪しい部位には色素の散布を行い、さらに組織の一部を採取する生検が行われます。生検が悪性でなくても繰り返し行う場合もあります。

次の問題は出血です。潰瘍面に血管が露出している場合にはその破綻により出血が起こり吐血や下血を起し、大出血ではショック状態となることもあります。この場合には緊急の止血治療が必要です。最近では内視鏡の進歩(電子内視鏡)や止血鉗子などの開発により内視鏡の直視下の止血操作が有効で、従来では緊急手術に頼っていた場合でも内視鏡のみで止血が可能となるケースが増えています。

「潰瘍」と反対に胃の壁から隆起する病気があります。一般には「胃ポリープ」と呼ばれるもので、形はいぼ状からキノコ状のもの、数も単発から十数個の多発ポリープ例もあります。組織学的には炎症性のものから、腺腫性さらに悪性まで多種に渡っています。診断は内視鏡を使った組織生検が必要不可欠ですが、大きなポリープの場合には全体の一部しか組織検査が出来ないために内部に悪性なものがあっても見逃す可能性があります。また、ポリープが大きくなると出血の危険性も生じてきます。これらを防止するためにポリープ全体を一括して採取するポリープ切除術(ポリペクトミー)が診断と治療を兼ねて有効です。

胃癌に関しては、次回にお話しします。

※東陽病院の休日当番日

11月23日(祝)・30日(日) 午前8時30分〜午後6時
医師2名が待機・来院の際は電話を ☎⑧13335

東陽病院 院長 伊藤 文憲



クリスマス おはなし会



楽しい劇やおはなしを行います。

日時 12月13日(土) 午後2時〜
場所 図書館2階ハイビジョンホール
定員 80名
申込み 受付は11月15日(土)から開始します。
図書館カウンターまたはお電話でどうぞ。

クリスマス

映画会

「ハリーポッターと秘密の部屋」

日時 12月21日(日) 午前10時、午後2時の2回上映
定員 各回120名
入場 整理券(無料)を12月6日(土)から図書館カウンターで配布します。
(※整理券は、お一人様5枚まで)



=町立図書館=
☎⑧3311



休館日

11月4日(火)、5日(水)、10日(月)、17日(月)、24日(月)、12月1日(月)、2日(火)、8日(月)